

ヨハネによる福音書6章1-21節 「イエスの弟子訓練」

1A 働きのための主の備え 1-15

1B 民の熱狂 1-4

2B 弟子たちへの試し 5-9

3B 羊飼いの養い 10-13

4B 民の祭り上げ 14-15

2A 試練の中のご臨在 16-21

1B 嵐の中での舟漕ぎ 16-18

2B 水を制する方 19-21

本文

ヨハネによる福音書6章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが、5章まで来ました。今日は午前中に前半部分を一節ずつ、午後に後半を見ていきたいと思います。今朝は、1節から21節までを見ていきたいと思います。

1A 働きのための主の備え 1-15

1B 民の熱狂 1-4

1 その後、イエスはガリラヤの湖、すなわち、ティベリアの湖の向こう岸に行かれた。2 大勢の群衆がイエスについて行った。イエスが病人たちになさっていたしるしを見たからであった。

前回私たちは、ベテスダの池で病の人をイエス様が立ち上がらせたしるしを見ました。ところが、それが安息日に行われたところなので、床を上げるのは安息日違反であるとみなしていたユダヤ人の指導者らの目に留まりました。それで、彼は癒したのはイエスであることを、指導者に告げます。癒しは受けるけれども、イエス様とつながるつもりはないという態度です。そして、罪を犯してはいけませんと、イエス様は彼に言われたけれども、その罪の中に留まるつもりだったのかしれません。イエス様からの祝福は受けたいけれども、イエス様とは付き合いたくない、自分の罪の中で生きたいという態度でした。

使徒ヨハネは、その流れをさらに6章において浮彫りにしていきます。初めは、ここにあるように大勢の群衆がついて来ているのに、6章の終わりには大勢の弟子たちがイエス様から離れたとあります。そして12弟子など、少人数しか残らなかったとあります。イエス様がもたらしてくれる祝福は求めているのですが、イエス様ご自身のところには来たくないのです。私たちは、そういったことが当たり前の社会に住んでいます。宗教というのは、自分に便益をもたらすものだからこそ信じるに値する、というものです。体が癒されたり、商売が繁盛したり、素敵な人と出会えると占いで約束

したりと、幸せな家庭が築けるとか、そういったことが目的になっているのが当たり前です。しかし、その中で、イエスご自身と共に、イエス様に近づいて歩んでいる弟子たちもいます。そして彼らは少ないです。私たちは、イエス様がどのようにして弟子たちを、訓練していったのかを見ていきたいと思います。

場所は、ガリラヤ湖の向こう岸です。ヨハネは、「[ティベリアの湖](#)」と言い換えていますが、ガリラヤ地方の首都は、ティベリアで、ガリラヤ湖の南西のところにありました。今も、そこがガリラヤ湖畔では最も栄えています。それで、ティベリアの湖と呼んでいますが、ここはユダヤ人は住むとはしませんでした。ガリラヤの国主はヘロデ・アンティパスで彼はそこに住んでいましたが、そこにユダヤ人の墓地があるので、墓地に入ると汚れるとされていました、そこに住みませんでした。けれども、ヘロデがそこにいます。そのヘロデがいるところで、イエス様のところに大勢の群衆が来ているということは、いささか彼にとって脅威になっていたかと思います。彼は王のような人ですから、イエス様が王としてユダヤ人の間で担ぎ上げられたら、確実に脅威となります。

そして、「向こう岸」とありますが、これはカペナウムを基準にしているのでしょうか、北東にあるベツサイダの方面であったのかもしれませんが。

そして彼らがついて来ている理由を見てください、「[イエスが病人たちになさっていたしるしを見たからであった。](#)」とあります。2章の最後に、エルサレムで多くの印を行われて、そこで人々がイエスを信じたけれども、イエス様ご自身は彼らに自分をゆだねなかったとあります。そしてガリラヤのカナでは、カペナウムから来た王室の役人に、息子が死にかけているから直してくださいとお願いしたところ、あなたがたは、しるしと不思議を見ないと信じないと、きっぱりと言われました。彼は、イエス様のことばを聞いて、信じて帰りましたが、それでイエス様が言葉によって支配する神の子なのだと悟ったのです。こうやって、しるしを見ることによって、この方が自分たちの救い主なのだとする機運が高まっていたのです。

3 [イエスは山に登り、弟子たちとともにそこに座られた。](#) 4 [ユダヤ人の祭りである過越が近づいていた。](#)

ガリラヤ湖の北側は緩やかな丘になっています。イエス様は山に登って、そこで座られました。弟子たちも共にいます。ここから、イエス様は、ご自身のわざを弟子たちに任せ、治めさせる訓練を行われます。

時は、「[ユダヤ人の祭りである過越](#)」です。ヨハネは、連続してユダヤ人の祭りのことを語られていますね。2章では、同じく過越の祭りの時にエルサレムで宮清めを行われました。5章、ベテスダの池のところで、病人を治されましたが、それもユダヤ人の祭りがあったから、とあります。そし

でここです、まだガリラヤ湖にいましたが、間もなく過越の祭りなので、ここにいるユダヤ人ももうすぐでエルサレムに都上りすることでしょう。

ここで大事なのは、ユダヤ人が過越の祭りを祝う時は、最もメシア待望が強くなることです。自分たちが救ってくださる方が来られることを、最も強く意識します。かつて自分たちが奴隷状態であったのを、神がエジプトを救われたのと同じように、今、自分たちがローマの圧制からメシアが我々を救い出してくださるという期待が膨らんだのです。その時に、イエス様が給食の奇跡を行なわれます。

2B 弟子たちへの試し 5-9

5 イエスは目を上げて、大勢の群衆がご自分の方に来るのを見て、ピリポに言われた。「どこからパンを買って来て、この人たちに食べさせようか。」6 イエスがこう言われたのは、ピリポを試すためであり、ご自分が何をしようとしているのかを、知っておられた。7 ピリポはイエスに答えた。「一人ひとりが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」

他の福音書では、もう夕方になっているので、彼らを解散させて、近くの村々で食べ物を買うようにさせてください、と弟子たちがイエス様に頼んでいたことがわかります。けれども、イエス様は、「あなたがたで食べさせなさい。」と言われました。

そこでピリポが答えているのですが、「二百デナリのパンでは足りません。」とのこと。一デナリは一日分の労働賃金なので、200 日分の労働賃金です。この人たちにパンを用意するだけで、6 か月以上の給料の値段です。そのぐらいいないと、成年男子だけで5千人ですから、賄うことはできません。しかし、これはイエス様が「ピリポを試すためであり」とあります。イエス様はピリポの口から、「主よ、あなたこそご存知です。」という言葉が出てくるのを期待されていたのだと思います。主はこれまで人々の必要を満たし、備えてくださいました。カナの婚礼で、ぶどう酒が切れた時に水をぶどう酒に変えられました。そこに神の栄光が現れていました。だからピリポは、自分たちでその必要を満たすのではなく、イエス様ご自身に目を向ければよかったです。

主は、信仰者をこのような状況に導かれます。必要に事欠くように主があえてされることがあります。そして、私たちにテストを与えられるのです。ちょうど学校で試験があるように、必要の源であるイエス様の所に行くことができるかどうかの試験を行なわれます。そのようにして、主ご自身に対する絶対的な信頼の下、主ご自身がすべてを支配されて、主ご自身が働くことのできるようにされようとしているのです。主は、弟子たちを用いて事を行われますが、その弟子たちは、イエスご自身に信頼するというを通して、イエス様が働かれるのを見ていきます。

8 弟子の一人、シモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。9 「ここに、大麦のパン五つと、

魚二匹を持っている少年がいます。でも、こんなに大勢の人々では、それが何になるでしょう。」

ピリポの次はアンデレですが、この二人は興味深いことに、ヨハネの福音書では三回、コンビで出てきます。1章で、バプテスマのヨハネの弟子であったところ、イエス様についていったのがアンデレです。ペテロの兄弟で、彼がペテロにイエス様を紹介しました。そしてピリポは、イエス様に呼ばれてから、ナタナエルにイエス様を紹介しています、「来て、見なさい」といった人です。そして12章に、ギリシア人がイエス様に会おうとしているのを伝えたのは、ピリポであり、次にアンデレです(21-22節)。

アンデレは、とりあえず少年を連れてきました。パンが五つ、魚が二匹です。この魚はおそらく日干しにしたものでしょう。ここで興味深いのは、その数、数字です。次に、これを食べた人々が、五千人と五の数字になっています。そして出エジプト記に、モーセの幕屋の構造が、五と二がたくさんでてきます。幕屋の幕は、五枚の幕をつなぎ合わせ、もう五枚の幕もつなぎあわせませす。五枚のものが二セットになっています。留め金は50個です。板をささえるための横木も、それぞれの面に五本、挿入します。そして、外庭の寸法ですが、幅が50キュビトで、長さが50かける2の百キュビトです。5があり、2があります。

そしてパウロの手紙を見ますと、エペソ4章では五つの役職があつて、それで教会が建て上げられていくことが書かれていますね。「4:11 こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒、ある人たちを預言者、ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました。」これらの数字の使われ方を見ると、「神の家を治めていく責任」のようなものではないか？と思われるます。弟子たちが今、イスラエルの民に主の備えられるパンと魚によって養います。こうやって、彼らを治め、監督する務めが担われているのです。

3B 羊飼いの養い 10-13

10 イエスは言われた。「人々を座らせなさい。」その場所には草がたくさんあつたので、男たちは座った。その数はおよそ五千人であつた。11 そうして、イエスはパンを取り、感謝の祈りをささげながら、座っている人たちに分け与えられた。魚も同じようにして、彼らが望むだけ与えられた。

ここの「座らせる」というのは、横たわるというような意味だそうです。過越の食事も、横たわるようにして座って食べます。そして、「草がたくさんあつた」ので、横たわりやすかつたのですが、過越の祭りが近づいている3月のことでしょう。イスラエルの3月は草がしっかりと生えていて、花も咲いていて、とてもきれいです。これはまるで、羊飼いである主が、羊であるご自分の民を養っているかのような風景です。「詩 23:1-2 【主】は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させいこいのみぎわに伴われます。」主が神に感謝をささげ、天からの備えとしてパンが与えられているのは、ユダヤ教のラビがいつも行うことですが、今ここで、パンも魚も思う存分、

食べることができるようにさせました。主は、私たちが十分に満たすことのできる方です。

12 彼らが十分食べたとき、イエスは弟子たちに言われた。「一つも無駄にならないように、余ったパン切れを集めなさい。」13 そこで彼らが集めると、大麦のパン五つを食べて余ったパン切れで、十二のかごがいっぱいになった。

残り物を無駄にしないのも、ユダヤ人たちの習慣です。ここで興味深いのは、12 のかごになったということです。この「十二」という数字は、おそらくイスラエル十二部族を表していたことでしょう。主なる神が、イスラエル全部族の必要を満たし、備えてくださる方だ、ということも暗示していると思います。

ですから、ここを総合して解釈しますと、全知全能の神、イスラエルの主であられる方が、羊飼いのようにしてイスラエル十二部族に、存分に糧を与えておられるという場面です。そして、それを後に十二使徒となり、教会の土台となり、新しいエルサレムの土台ともなる彼らが責任をもって治めている姿であります。

4B 民の祭り上げ 14-15

このことから、イエス様のしるしによって、この方にイスラエルの神の栄光を見る必要があるのです。イエスが、確かに主なる神ご自身であり、また神から遣わされた方であり、この方にこそ、まことの命があるとしなければいけません。ところが、彼らがイエス様について来ていたのは、別の理由でした。

14 人々はイエスがなさったしるしを見て、「まことにこの方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と言った。15 イエスは、人々がやって来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、再びただ一人で山に退かれた。

彼らは、神の救いを求めていました。今ここで、その救いが来るのだという熱狂状態になりました。過越の祭りを前にして、今こそイスラエルが救われる、そしてこの方が来るべき預言者であるとみなしたのです。そして、王に祭り上げようとして、「まことにこの方こそ、世に来られるはずの預言者だ」というのは、モーセが申命記 18 章 18 節で、自分のような預言者を神が起こすと語ったからです。その預言者がメシア、キリストでもあると彼らは考えました。けれども、イエス様は素早く、この動きに反応し、その場から退かれたのです。

なぜでしょうか？ご自分を王にしようとする動機が誤っていたからです。26 節をご覧ください、「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。」言い換えれば、民衆は自分を支配する王を迎えて

いたのではなく、自分の必要を満たす、自分に仕えてくれる存在を求めていたのです。王として担ぎ上げることによって、自分の得になるよことをしてくれると期待して、王にしようとしていたのです。

かつて、妻がよく見ていた朝鮮王朝のドラマがあります。そこには必ず苦悩している王の姿を見ることができます。王は絶対君主であり、自分が正しいと思うことをことごとく行なうことができる地位にいるはずなのに、実は何もできないことを発見する苦悩です。宮廷内のある派閥が、王族のある人を擁立するために働きかけます。それでその人が王になれば、自分たちの派閥の権益を、王を通して宮廷内に広げようとします。自分を王としてくれた人々だから、その人々の要求に応えなければ自分の立場が危くなる、という葛藤です。つまり、イエス様を王として持ち上げ、祭り上げるのですが、それは、自分の理想像を彼に押し付けることによって、自分の欲求を満たしてくれる道具、しもべにしているのです。信仰生活において、後々に大きな違いが出ます。

信仰を持つことは、一つの大きな決断をすることです。これまでは、「自分が生きていくためには、自分がそうすればよいのか。」という哲学を持って生きてきました。その延長線上で、キリスト教も自分を生かすために有益ではないかと思っておられるならば、失望します。ちょうどイエス様が、ユダヤ人民衆から離れられたように、イエス様は離れてしまわれます。なぜなら、自分を生かすのではなく、自分の心の王座にイエス様が着かれることを決断するのが信仰だからです。イエスが主であると告白することが、キリスト者の信仰だからです。自分を生かすための僕ではなく、自分が死に、キリストが自分の心の王としてお迎えすることなのです。

しかし、バプテスマのヨハネの時から、彼でさえキリストではないか？という強い期待がかけられていましたが、彼はそれを拒み、そしてイエス様を見た時にこういったのです。「1:29 見よ、世の罪を取り除く神の子羊。」キリストが、過越の子羊になるというのが、ヨハネが宣言したことです。この方は王であられますが、その方が罪のための供え物となるという、神の驚くべき計画があったのです。イエスを主とすることは、私たちの期待とは別、裏腹になることがあります。その時こそ、イエス様が、この不条理の世において、その不条理を作り出している人々の罪のために、そして自分の罪のために来られて、その中で死なれたのだということを覚えるべきです。

2A 試練の中のご臨在 16-21

1B 嵐の中での舟漕ぎ 16-18

16 夕方になって、弟子たちは湖畔に下りて行った。17 そして、舟に乗り込み、カペナウムの方へと湖を渡って行った。すでにあたりは暗く、イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった。18 強風が吹いて湖は荒れ始めた。

ガリラヤ湖の付近に行きますと、風が強く吹いています。ガリラヤ湖から死海にかけて南北に、「ヨルダン渓谷」という低地が走っています。世界で最も低い陸地が死海であることは有名ですね。

ガリラヤ湖も海水面下にあります。したがって、気温の変化などで強い風が吹くことはしばしばです。そこで彼らは向こう岸にあるカペナウムに行こうとしましたが、強風に見舞われました。

イエス様は、五千人の給食を与えられましたが、そこで弟子たちがどれだけ、ご自分のされたことが分かっていたのか？といいますが、分かっていたことが他の福音書に書いてあります。それでイエス様は、弟子たちだけの間でご自分を示されます。ここで、再び試練です。先ほどは、大人の男だけで五千人もいる群衆に食べさせなければいけないという危機でした。こちらは、夜に強風が吹いて湖が荒れ始めるという試練です。試練は、私たちは嫌です。できるならば、試練がなければいいのに、と思います。けれども、主が誰であるかを知るには、通らなければいけない、必要なことです。

2B 水を制する方 19-21

19 そして、二十五ないし三十スタディオンほど漕ぎ出したころ、弟子たちは、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て恐れた。20 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしだ。恐れることはない。」21 それで彼らは、イエスを喜んで舟に迎えた。すると、舟はすぐに目的地に着いた。

ここで大事なのは、「わたしだ」という主の言葉です。他のイスラエルの人々は、自分たちの腹を満たしてくれたからこの方を王としようとしたのですが、弟子たちは「わたしだ」というイエス様の言葉を聞いて、安心し、喜んで舟に迎え入れていることです。弟子たちは、イエス様をイエス様として、そのままのお姿を喜び、迎え入れていたのです。これが本当の信仰です。ヨハネの福音書には、「わたしだ」という言葉が数多く出てきます。ギリシア語では、「エゴ・エイミー」です。自分の必要が満たされる前に、この方をこの方としてそのまま知り、受け入れることです。

この後で、イスラエル人たちが「あなたはパンを天から降らせてくださるのですか。」と聞きますが、イエス様は、「わたしがいのちのパンです。(35 節)」と言われます。また、人が暗やみのこの世において光を求めている時、「わたしは、世の光です。(8:12)」と言われました。人々が人生の導きを求めている時、「わたしは羊の門です。(10:7)」「わたしは良い牧者です。(10:11)」と言われました。ラザロという人が死んで姉妹が悲しんでいるとき、主は、「わたしは、よみがえりです。いのちです。(11:25)」と言われました。そして弟子たちが、「どうしてあなたが行かれる道が分かりましょうか。」と聞いた時に、イエス様は、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。(14:6)」と言われました。

そして、この「わたしだ」あるいは、「わたしがある」、英語ですと「I AM」という言葉は、出エジプト記で、神がモーセに現われた時にご自分の名前を紹介された時に言われた言葉です。「3:14 わたしは『わたしはある』という者である。」と言われました。矛盾するようですが、この方を初めに受け

入れ、この方こそが自分の全てであると認め、自分の人生をこの方に明け渡す時、私たちの必要は付いて満たされます。自分を生かすためにこの方を用いようとするならば、決して受け取ることができることを期待してはいけませんが、この方にすべてを明け渡す時に、主がその必要をすべて満たして下さいます。